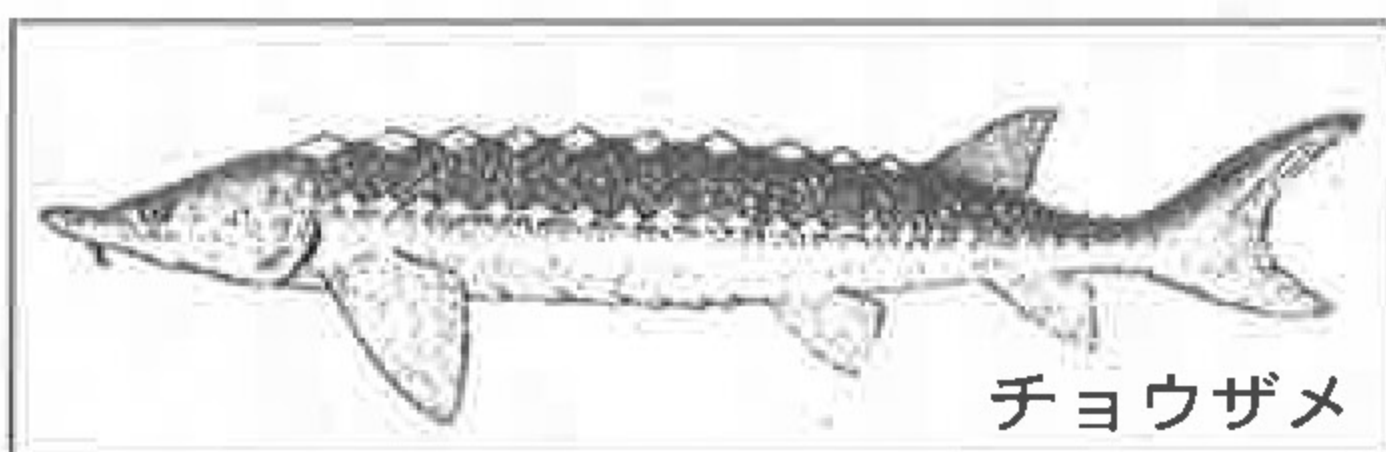


断章 旭川のアイヌ語 地名研究

(38)

高橋 基



チョウザメ

ないだいぶが
内大部川は、石狩川の左岸の支流で、旭川市と深川市の境界の川である。明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、内大部川の地名解を次のように書いた。

「ナイタユベ (nai-ta-yube) 川鮫―此川へ鮫入ルニアラス、本川 (註・石狩川) 絶壁ノ下ニテ鮫ヲ捕リ、舟ニテ此川へ運ビ陸ニ揚グ。故ニ此名アリ。」

永田方正が書いた川鮫は、図のチョウザメのことで、アイヌ語でユベ (yube)。チョウザメは、その卵の塩漬けがキャビアと呼ばれる高級珍味となる魚。図のように鮫に似ていてチョウザメの名がつくが、サメは軟骨魚類でチョウザメは硬骨魚類の仲間。体表には板状の堅い鱗があり、これが蝶の形に似ているので鮫鮫の

名称がついたといわれている (蝶番の説もある)。明治時代まで、石狩川や天塩川に、春に産卵のため海から上り、秋に下ったという。両河川とも、今では幻の魚である。

安政四年 (一八五七)、松浦武四郎は上川を調査するために石狩河口を丸木舟で出発し、七日目に、永田方正が「石狩川の絶壁でチョウザメを捕り、ナイタユベ (内大部川) に陸

―内大部川のアイヌ語名(上)―

揚げした」場所を通過し、漸く神居古潭に到着する。

松浦武四郎にもこの石狩川の絶壁は強烈な印象だったのである。写真①

は、その時の調査報文の「再篇石狩日誌」に描いた石狩川のこの絶壁と内大部川河口の図で、松浦武四郎の自筆である。写真②は、昭和六十二年に筆者が四人乗りゴムボートでこの絶壁の下を下った時の実景で

ある。かつてチョウザメが棲息していたことを連想させるに十分な雰囲気であった。

松浦武四郎は、帰途、神居古潭で、「シリコツネは括槍にて此辺りを乗り廻し居りしが、一尾の潜龍沙魚を捕りて来る」と記したが、『石狩日誌』で

は、往路、「クウチンコロは括槍 (マレプ) を提て岩上に暫時佇立せしが四尺斗の潜龍沙魚を一尾に三尺斗のチライ (註・イトウ) を得来る」と書いている。

また、松浦武四郎は、内大部川の由来になったチョウザメについて、「蝦夷訓蒙図彙」で鮫鮫の絵を添えて次のように解説している。「鮫鮫―潜龍沙魚―ユウベ、カルマー石狩川上九十里の処まですめり。肉白くして味よろし。其皮かたくして、好事家の玩物なり。大きき四五尺に及ぶ物有。是を以て膠を作る也。」

旭川のアイヌ人たちは、神居古



写真①



写真②

潭のチョウザメをシャメカムイと崇拜し、ヌプリコロカムイ (山の神) の熊と仲の良い友達で、一方は水、一方は山の守護神として深く尊敬し、毎年のサケやマスのお初は、この二神に供えたという。また、石狩川を丸木舟で上る時も、「おれはお前たちの部下のものだよ」ということをシャメカムイに告げる意味で、舟ばたをたたく。そうすると無事に通過することができるといふ。丸木舟での往來の重要な儀式であった。

チョウザメは、石狩川の幻の魚となったが、内大部川のアイヌ語名のナイタユベ (ナイタイベ) によって、往時を回想させてくれる。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します